

■ 物 語 序 説

有 精 堂 選 書

物 語 序 説

早稲田大学講師
上 坂 信 男 著



有 精 堂

著者略歴

昭和二十五年早稲田大学文学部卒、現在早稲田大学専任講師、青山学院大学講師。

〈主要論文〉「祭の使巻の成立をめぐって」「うぐいすとほととぎすと―源氏物語心象研究断章」「源順伝覚書」他

昭和四十二年四月三十日発行

定価七三〇円

著者 上^{うえ} 坂^{さか} 信^{のぶ} 男^お

発行者 山 崎 清 一

印刷者 株式会社 井村印刷所

発行所 有精堂出版株式会社

東京都千代田区神田神保町一の三九
振替口座東京四〇六八四番

◇乱丁・落丁本はおとりかえいたしません。

序

上坂信男君は昭和二十二年に早稲田大学の高等師範部を卒業し、同年文学部の国文学専攻科に入学し、二十五年に卒業しておられるから、私とは二十年以上の交際である。非常に謹直篤実な人柄で、病弱の夫人をひとりつつ、戦後の頹廢した学風にいささかも汚染されず、孜孜としてその志す平安朝文学に専念して来られたひとである。はじめは池田亀鑑博士や吉田幸一博士などの文献学的方法にあくがれをもっておられたようであるが、そして卒業論文の「宇津保物語の研究」もどちらかといえば書誌学的なもので、その磐石の上に五十嵐力博士の文芸学的批評を耀かそうとしたものであったが、そののち笹淵友一博士らの宇津保研究会の同人となり、その影響下に『宇津保物語』の研究も長足に進歩し、幾多の論文を発表し、漸次独自の学説を形成して行かれたのである。それとともに『宇津保物語』以前に溯り、『竹取物語』『伊勢物語』『豊陰』『住吉物語』、同時代かあるいは降っては『多武峰少将物語』『蜻蛉日記』『和泉式部日記』、そして『宇津保物語』研究の最終の目的たる『源氏物語』まで視野をひろげ、精

綴で尖鋭な文学批評を展開してゆかれたのである。

本書『物語序説』は、君の従来の研究のうちの比較的小篇の論文・エッセイを集成したものであるが、わが古代物語の文学的方法である虚構ということを主題として、『竹取物語』から『源氏物語』へのその発展と種々相を体系的によくまとめてあり、また一篇々に取り離して見ても、『竹取』『宇津保』『住吉』『多武峰』など、それぞれ新しい研究の視点と、成果を見せていて、その叙述も精細であり、新旧諸学説を批判摂取して潑刺としている。また、『蜻蛉日記』を、『枕草子』の「をかし」の文学、『源氏物語』の「物のあはれ」の文学にたいして「あさまし」の文学という点から見ているのも様式論的に面白く、『源氏物語』の長篇性を人間造型、思想具現という点から、必然そうならざるをえなかったことを論証しているのも、慧眼と言わねばならない。また、『源氏物語』のストーリー展開のモメントとして夢がどのようなものちにいられているかを物語構想史から仔細に観察しているのも、虚構の手法を主題として、その史的発展をみようとする著者にとっては必須の作業であつたのである。

しかし、これらの諸編が内容においていかに多岐多端であり、精緻尖鋭であり、新旧の学説を博渉しておろうとも、君にとっては氷山の一角にすぎない。著者の机辺には『宇津保物語』

及びその周辺に関する既発表・未発表の論稿がうずたかくあり、いずれ相ついで上梓されることになろう。上坂君は、先師五十嵐力博士が昭和二十年に早大を退隠されて直後、私が指導の任にあたった俊秀の一人である。その君が二十年研鑽の一部をかくも見事にまとめて処女刊行されるにあたって私はうたた感慨なきをえない。

昭和四十二年三月二十一日 春分の日

岡 一 男

目次

序 「岡 一男」

源氏物語以前 — まえがきにかえて — 一

I 虚構の種々相

竹取物語をめぐる 六

問題の所在 — 作品の解釈(一) — 作品の解釈(二) — 作品の解釈(三) —
方法 — 意義 〈物語史の起点〉 — 本旨 〈比較文芸史的に〉

宇津保物語の構造 五二

兼雅像の変貌 〈序にかえて〉 — 構造分析 〈第一部〉 — 構造分析
〈第二部〉 — 構造分析 〈第三・四部の大概〉 — 構造の二重性 がも
たらしたもの 〈物語の長篇化〉

住吉物語の古物語性 七七

まえがき——本質・内容——古物語性へ中世同系作品との差——
フィロソフィカル・レアリズムへ文学史的意義

落窪物語の方法

まえがき——作中人物の形象——物語の構造——むすび

Ⅱ 虚構への接近 (一)

歌物語序説

——伊勢物語をめぐる——

主題となる歌へ業平にからむ段(一)——歌一首の段へ業平にからむ段
(二)——作られた主人公像へ虚構の段——歌物語の位置へまとめ
——附、〈『伊勢集』・『大和物語』・『平中物語』

家集の歌物語化

——いわゆる『豊蔭』のばあい——

まえがきへ作者と書名——序の意味するもの——好色の黄昏へ生活
の虚構——好色への憧憬へ文学の虚構——自己の醜化へ文体の問題

——構成〈歌物語への志向〉——内容〈女性群像と豊蔭の態度〉——
歌物語史の行方を占うもの——むすび

多武峰少将をめぐって……………二六

モティーフ〈高光出家の真因〉——作者〈作中人物への距離〉——方
法〈多元描写〉——原資料〈形成過程〉——様式〈物語と日記と集
と〉——本質〈歌物語性〉——再び作者〈その姿勢〉——むすび〈物
語史への寄与〉——附、扇流しの物語

Ⅲ 虚構への接近(二)

蜻蛉日記序説……………二九

女性史の曲り角〈女流文芸の伝統〉——古物語と日記〈文学様式の自
覚〉——夫、藤原兼家〈モティーフ〉——キイ・ワード「あさまし」
〈本質〉——むすび〈内容の変質〉

和泉式部日記をめぐって……………三九

視圈外描写の特質——視圈外描写を試みる態度——作品の方法として

の視点の移動——作品の本旨——附・『土佐日記』

Ⅵ 虚構の達成

源氏物語序説

教養のあり方へ物のあわれ、モティーフ——理想の主張へ虚構の必
要——人間造型へ長篇性(+)——思想の具現へ長篇性(+)——夢さ
まさへ虚構の現実化——伝統技法の継承——

あとがき

.....二二

.....二四

源氏物語以前 — まえがきにかえて —

一

『古事記』も中巻応神天皇の条に、伊豆志衰登売神をめぐる二柱の神の物語がある。兄にあたる秋山之下氷壮夫が、衰登売を得かねているとき、弟の春山之霞壮夫が「易く得む」(簡単に結婚できよう)と言ったことから、「若し汝、此の嬢子を得ること有らば、上下の衣服を避り、身の高を量りて麴酒を醸み、亦山河の物を悉に備へ設けて、宇礼豆玖を為む」(もしお前がこれとおとめと結婚できたら、着ている物をあげよう。背丈ほどの甕に酒を造つてあげよう。山野河海の産物も集めて賭け物にしよう。)といった兄のことばを、弟がそのまま母親にいうと、母親は不可能な事を平気で言う兄を懲らそうというのであらう、藤づるを取つて来て、一晚のうちに「衣禪及襪沓を織り縫ひ、亦弓矢を作りて、其衣禪等を服せ、其の弓矢を取らしめて、其の嬢子の家に遣はせば、其衣服及弓矢悉に藤の花に成」ったという。そこで霞壮夫が其の弓矢を嬢子の厠にかけておくと、「伊豆志衰登売、其の花を異しと思ひて持ち来る時に、其の嬢子の後に立ちて、其の屋に入る即ち、婚ひしつ。」というわけだ、霞壮夫は賭に勝つのである。話は、兄の契約不履行と続き、それを咎める母親の「我が御世の事、能くこそ神に習はぬ。又うつしき青人草習へや、其物償はぬ。」(私の眼の黒い間は神に真似よう。だのにお前は人間に真似て嘘をつき、賭物を償わない)そのようなものは、伊豆志河の河島の一節竹のように青くしおれてしまうがよいなどとの呪いのことばに発展する。そして、それゆえに八年間「干萎え、病み枯れ」た下水氷壮夫が思ひ悲しみ

泣いて請うと、母親が呪いを解いたので、兄の「身本の如く安らかに平^{たいら}」いだ、というのである。

この話の始原は秋を兄とする点から考えて、農耕社会に入る前の古いものであろうが、藤蔓で作った衣服弓矢等々に花が咲いたり、呪いをかけたり解いたりして、生命の与奪も自由にできることなどに、知性を越えるものがある。いわば神話の論理とでもいうものに支えられて、この話は成り立っているのである。思想といい、プロットといい、性格といい、近代人の知性に耐えるように創作されていく近代小説との遙かな距離を思う。

神話の論理と知性の論理、この両極の間にあって、わが平安朝に花を開いた物語文学はどういう位置を占めるのだろうか。竹の中にかくれ、空に帰っていくかくや姫を軸として展開するかぎり『竹取物語』は、それを伝奇と一般には称しているけれど——神話性が残っているわけであるし、『宇津保』にしても俊蔭一族の天祐神助を踏まえて成り立つ限り同断である。『源氏』にしても言やら観相に出発点をおいている限り、なお遺響を伝えているものといえる。しかし、古代人の文化の発展とともに物語にも知性の立場から批判が加えられたことは『三玉絵』の序文や『枕草子』の一節などで分る。ということとは、平安貴族の知性に見合うように作者も意図したろうことを思わせる。古代性とその超克と言ひ換えることもできる。その兼ね合いは何時ごろからどのようになされたか——それこそ物語の本質に触れ、各作品の方法を明らかにする一途であらう——を各作品に即して見ていきたい。

二

つぎには、物語史それも『源氏物語』以前に限っての興味ある問題点を抽出してみよう。

まず、男性作者から女性作者への交代がある。現実に対する批判意識が初期には男性に強く、教化意識のもと

に作品形成が試みられたものと思う。『竹取』や『宇津保』以下にそれを感じるが、後者については社会認識の興味が長篇化の原因の有力なものであったことを思うとき、新たな関心——複雑な人間関係を描くには長篇性を必要とすること——を抱く。ともあれ、現実材を得て虚構の世界に活用投入していくテクニクは、やはり社会的視野の広い男性のものだったようである。これらの物語制作と同時代の女流文学者は、歌人として小野小町や伊勢御以下を数えるが彼女たちの文芸作品に喜怒哀楽の情は秀れて詠み込まれていても、所詠は境遇に溺れている者の抒情に他ならず、現実の境遇を一步つき離して冷静に観る眼をもたない彼女たちに物語文学の道は遠いものといわねばなるまい。

ところが、男性の物語創作の意欲はある時期のころから退潮していく。わたしはその時期を安和の変のころと思っているが、以来、男性文学者は後世にいわゆる文人的性格を帯び、身を以て現実を批判する為にみずから世を遁れ、その活動は世人の教化よりは、自らの心遣りとする者——慶滋保胤や源為憲など——あるいは俗世に留って世を批判する者——前中書王など——さもなくば時の流れに随順していく者などを大別できるが、彼等の作品は趣味・思想に偏向してまともに人間を扱うことがなくなった。こういう文芸史上の過渡期の所産としてみると、『宇津保』にみられる思想のゆれ、歌物語の消滅とくに『豊蔭』の意義、さらに女性の手による『多武峰少将』の成立、などは理解し易くなる。

そうした女流への批判意識の転移を明確に伝えるのが『蜻蛉日記』である。『枕草子』を「をかし」の文学、『源氏物語』を「あわれ」の文学とよくいうが、そしてそれは適切な説明なのだが、それに准じていうなら『蜻蛉日記』三巻はまことに「あさまし」の文学とでもいうべきものである。この「あさまし」という形容詞には先輩女流の小町にも伊勢にもみられない批判意識が濃縮されているのではないか。『蜻蛉』の作者は結局夫の愛に寄

せる期待を捨てて母性に生きようとする。そこには、自己の運命の指針を自己の知慧で発見していく、女性の新しい姿が認められる。こうした『蜻蛉』作者に開眼されて後続の女流文学者の中から『和泉式部日記』・『枕草子』・『源氏物語』は簇出したのであろう。自己の運命を開拓しようとするときに、起る周囲との摩擦に妥協屈伏しない高い魂がそれら作品の形成の根源である。愛情を迫害するような階級社会の習俗に対する抵抗の姿勢を崩さない和泉式部も、純粹な人間の感覚を圧迫するような和歌的伝統に対して反撥する清少納言も、虚構を利用して歴史以上に、現実の批判、理想の強調を盛り込み、人間の生き方、社会の在り方を温厚な態度で説得している紫式部も、『蜻蛉』を魁けとする精神的風土に開いた見事な花であるという意味で共通するものがある。この相承伝統の関係が興味深い第二点である。

第三は、元来、事実から出発した歌物語が、極く短い期間に、数少ない作品を留めて解体していった事実の探究である。『伊勢物語』が示すように、醜化表現の虚構への傾斜は、完全なる虚構の段の増益を許すことになるが、そのとき、歌物語は本質に変化を来たし、と同時に本来の事実性を装う『大和物語』的行き方を派生することになり、一方では仮作物語に他方では説話や日記文学に解体吸収されていったようである。

第四として、物語の構造について、短篇は短篇なり、長篇は長篇なりに、その構造如何ということも関心深い課題である。ただ、これについては『宇津保物語』や『源氏物語』について、それぞれ後日改めて発表したいと願っているので、本書では序説的にしか触れることができない。

およそ、物語が一つの文芸様式として認められるためには主題と描写と構想とを備えていることが最低必要条件である。そこに後代の小説への親縁性もあるのだが、構想は虚構においてもっとも有効に発揮される。如上の幾課題に触れながらも、本書が虚構の問題を物語研究の中心に据えたのはそうした理由による。

I 虚構の種々相

竹取物語をめぐる

一、問題の所在……(一〇) 二、作品の解釈(一)……(二〇) 三、作品の解釈
 (二)……(二二) 四、作品の解釈(三)……(二四) 五、方法……(二五) 六、意
 義(物語史の起点)……(二六) 七、本旨(比較文芸史的に)……(二七)

一

『竹取物語』は一回的に成立したものである。その構成において、後記挿入とか成長とかいうようなことは考えられない。これまでも、冒頭から結末まで逐次執筆されたものという大前提のもとに、作品としての『竹取物語』は論じられてきた。にもかかわらず、作品の主題や本質については、写実物語といい、伝奇物語といって、全く相反する見解が主張されている。それは何に起因するのだろうか。

この物語は、これまでも三部構成とみることが行なわれ、近くは文章論の立場から、阪倉博士によってそのことが論証されている。^(注一) 貴公子の求婚から帝の求婚までの第二部が「修飾的要素として」「附加挿入された形を

と」とみるこの説は、かつて柳田国男氏が「説話の自由領域」ということばで、第二部の伸縮自在な可変性を指摘して以来の、その点に関する限り、いわば伝統的見解に文章論の立場から支持を与えたものである。^(注二)

仔細にみると、物語の枠として形式化している部分(第一・三部)と内容的に独創の試みられる部分(第二部)

と、そのいずれに比重を置くか、論ずるもので解釈の差はあるようだけれど、それまでに、どのような「竹取説話」があったとしても、こうまで整った求婚難題の話はなかったろうし、作品の内容に即してみても、これもまたすでに指摘されているところではあるけれど、五人の貴公子が官位や人柄を対比的に描かれ、しかも各人に課せられた難題と暗合するように命名され、さらに失敗の後に添えられた地口にも似た語源説明といい、すべて周知な用意の所産とみられるのであって、それらの最後に十善天子の登場することは、一層主題のありどころを明白に物語っていると思う。伝承説話の単なる文字化とは考えられないわけである。

それというのも、文学の方法としてみれば、多少の事情の差はあるにしても、説話集や『伊勢物語』などに見られると同様に、個々の説話を適宜配列するという、もっとも単純な構成をこの物語がもっているわけなのであるけれど、そのこと以上に注意されるのは、この第二部初めでは、かくや姫のことを再三「変化の人」「変化の者」という、正しく第一部異常出生の部分に照応することばのやりとりを、姫と翁との会話から聞くことができるにもかかわらず、そののちのかくや姫は、まるで普通の人間として生まれ育った女性のような錯覚を起こさせるといふことである。例えば、桃太郎が鬼が島征伐の際にみせる異常出生者特有の超人的活躍や小さ子伝説と概括される少彦名や一寸法師の話にみる超現実の生活がかくや姫にはないのである。強いていうなら、これほどまでに絶世の美人であること、さては、男たちの求婚を拒否しとおすことなどが常軌を逸していることになるかも知れないけれど、特に珍しい後者は、全く超人間的態度であっても、せいぜい後続の内容——帝の求婚の場面を盛り上げる準備段階とみることでできない。

ところが、この帝の妻問い、——前に引いた第二部も終りに近づくにしたがって、俄然、冒頭の異常出生の話に照応する記事が頻出する。ここで特徴的な翁と姫とのことばを挙げておこう。